

## 裏と表

一枚の紙、一枚の衣服にでも、裏と表があるように、一切のものには裏と表がある。人の体にだって、表と裏がある。表は、たいがい自分で見ることが出来るが、体の裏は、見ることさえほとんど出来ない。お葬式には、汗をかきつつ、礼装で出かけても、家にかえれば、真裸になつて風を入れる。

「如実修行」という鸞師のみ教を例会で頂く。如実の実は、真実である。真実とは、如来心の、自利真実、利他真実のことである。その真実の如く修行する、これを又「名義の如く」とも言われている。名義とは、名号のわけがら、謂れのことである。

真実、これを觀經では、至誠心と言われるが、この至誠心を、善導大師は解釈して、「外に、賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐けばなり。」と言われた。それ承けて、法然聖人は、選択集に、外は賢にして内は愚、外は善にして内は悪、外は精進にして、内は懈怠の心を懐くことを示して、次に、

「もしそれ外を翻して、内に蓄へなば、祀まつに出要にそなへつべし。」

と言われた。これは、外の賢善精進を内に翻し蓄える、即ち外賢内賢の世界の者は、往生が出来ると言われたのである。

次に「内に虚仮を懐く」とは、内心と外相と調はざる相であつて、内は虚しく外は実、内は仮にして外は真、即ち外は真実で、内は虚仮なる人間の相を示し、そうして次の如く教えられる。

「もしそれ内を翻して外に播ほさば、また出要に足りぬべし。」

これは、内愚を自覚して、外賢を消すことである。内の不真実虚仮を外に及ぼして、外の賢善精進の偽相をすてることである。即ち外愚内愚に至ることである。この外愚内愚の人も往生が出来ると言われるのである。以上の如く、外賢内賢の人と、外愚内愚の人との往生を肯定せられる中には又、外愚内賢の人の往生を許されたのはもちろんである。救われないのは、外賢内愚の人である。

外賢内賢は、人類の理想である。如来においてのみ肯定されることである。故に、法然上人の意は、外愚内愚の世界にあつたであろう。しかしそれを拝まれた聖人は、愚禿抄に

「賢者の信を聞きて 愚禿が心をあらはす。

賢者の信は 内は賢にして外は愚なり。

愚禿が心は 内は愚にして外は賢なり。」

と歎ぜられた。賢者の心は、外愚内愚であつたかも知れない。しかし、外からうかがう、賢者の信は内賢外愚である。それに照されて、内に自証する愚禿が心は、内愚外資の凡夫であつた。

「内は愚にして外は賢なり」との自証こそ、最も深く己にかえり、救われざる相を見、それ故に如来の真実に動かされて、限りなく、内を外に翻して、虚仮から真実へ歩む者のたどる道である。我らは、内愚外資のいたづらものとさらけ出して、念仏せられ

る聖人の上に、内賢外愚の尊さを拝むことが出来るのである。これいのちの世界の不可思議である。

大経には、「言行忠信にして、表裏相應し、人よく自ら度し。」とあり、内と外、裏と表とが相応する世界、深く考えさせられることではある。